

# 東京オリンピックから見たもう1つの金メダル攻防戦

—スポーツにおけるアジア人的交流のフレームワーク—

周 牧 之

2020 東京五輪は、新型コロナウイルスパンデミックによる1年の延期を経て、2021年7月23日から8月8日まで開催された。様々な困難を乗り越え競技自体は順調に展開された。

同大会での金メダルランキングを見ると、中国は38枚、日本は27枚と、アメリカに次いで第2位、第3位に入った。オリンピック125年の歴史上、金メダルトップ3に、初めてアジアの国が2カ国入った。本論は、五輪でのアジア躍進の裏にあるもう1つの金メダル攻防戦を解き明かす。

2020 東京五輪について、筆者はこれまで三つの文章を発表してきた。

「为“紧急事态宣言”下的东京奥运会祈福」と題した中国語の文章が、2021年7月23日に中国の大手ネットメディア『中国網』で発表された<sup>1)</sup>。7月28日には同文章の英語版「Praying for Tokyo Olympics under state of emergency」が『China Net』に掲載された<sup>2)</sup>。

同8月19日には「奥运金牌攻防战的亚洲之路」と題した中国語の文章が、『中国網』で発表された<sup>3)</sup>。9月7日には同文章の英語版「Asian path of winning and securing Olympic gold medals」が『China Net』に掲載された<sup>4)</sup>。

同8月31日に「从东京奥运会看亚洲人文交往格局」と題した中国語の文章が、『中国網』で発表された<sup>5)</sup>。9月6日には同文章の英語版「A look at Asia's people-to-people exchanges from Tokyo 2020」が『China Net』に掲載された<sup>6)</sup>。

これらの文章は『China Daily』や中国國務院新聞弁公室『China SCIO Online』を始め多くのメディアとプラットフォームに転載された。本論文では、これらの文章をベースに注釈や図表を加え、最新情報をアップデートし、問題提起をさらに掘り下げて検証する。

## 1. 金メダルの鉱脈をどう作る？

日本は2020東京オリンピックで27枚の金メダル、14枚の銀メダル、17枚の銅メダルを獲得、計58枚のメダル奪取は日本の五輪大会参加史上最高数となった。とくに柔道は、金メダル9枚を奪い、日本の金メダル総数の三分之一を稼ぐ最大のゴールド競技種目となった。

表1で示すように2020東京五輪は、史上最多の33競技種目が行われ、なかでも柔道は15枚の金メダル数を誇る一大競技種目だった。

表1 2020東京五輪33競技種目における金メダル数

順位	競技種目	金メダル数	順位	競技種目	金メダル数
1	水泳	49	18	テニス	5
2	陸上	48	19	卓球	5
3	自転車	22	20	バドミントン	5
4	レスリング	18	21	バスケットボール	4
5	体操	18	22	バレーボール	4
6	カヌー	16	23	スケートボード	4
7	射撃	15	24	トライアスロン	3
8	柔道	15	25	サッカー	2
9	ウエイトリフティング	14	26	ゴルフ	2
10	ボート	14	27	近代五種	2
11	ボクシング	13	28	ホッケー	2
12	フェンシング	12	29	ハンドボール	2
13	セーリング	10	30	野球・ソフトボール	2
14	テコンドー	8	31	ラグビー	2
15	空手	8	32	スポーツクライミング	2
16	馬術	6	33	サーフィン	2
17	アーチェリー	5		合計	339

注1：順位は競技種目の金メダル数順、同数の場合は五輪正式種目になった時期順である。

注2：太文字の競技種目は1964東京五輪、1988ソウル五輪、2020東京五輪で初めて正式競技種目及び公開競技となったものである。

出所：2020東京五輪公式サイト、各競技種目国際連盟公式サイトなどより作成。

柔道は1964東京五輪で初めて採用された競技種目で、当初の金メダル数は僅か4枚であった。その後、種目メダル数を徐々に増やした柔道は、水泳、陸上、体操、自転車、レスリング、カヌーに次いでメダル数を誇る五輪競技種目となった。まさに「小さく産んで大きく育てた」成功事例である。

柔道は、正式なオリンピック競技種目となって以来、一貫として日本の最大の金メダル競技種目であり続けた。表2で示すようにとくに、1992バルセロナ五輪、1996アトランタ五輪、2000シドニー五輪、2004アテネ五輪において柔道は、日本の金メダル総数のそれぞれ67%、100%、80%、50%を稼いだ。柔道は、これらの五輪大会で日本の金メダル争奪戦の支柱であった。

柔道が競技種目から外された1968メキシコシティ五輪及び日本が参加をボイコットした1980モスクワ五輪を除き、これまでに柔道競技種目のあった五輪大会は計13回あった。日

表 2 各五輪大会において日本が獲得した柔道金メダル数

五輪大会	金メダル総数	柔道	金メダル総数における柔道の比重
1964 東京五輪	16	3	19%
1968 メキシコシティ五輪	11	0	0%
1972 ミュンヘン五輪	13	3	23%
1976 モントリオール五輪	9	3	33%
1980 モスクワ五輪	0	0	—
1984 ロサンゼルス五輪	10	4	40%
1988 ソウル五輪	4	1	25%
1992 バルセロナ五輪	3	2	67%
1996 アトランタ五輪	3	3	100%
2000 シドニー五輪	5	4	80%
2004 アテネ五輪	16	8	50%
2008 北京五輪	9	4	44%
2012 ロンドン五輪	7	1	14%
2016 リオ五輪	12	3	25%
2020 東京五輪	27	9	33%
合計	145	48	33%

注 1：1968 メキシコシティ五輪では柔道は競技種目から外された。

注 2：日本は 1980 モスクワ五輪参加をボイコットしたため金メダル数はゼロである。

出所：2020 東京五輪公式サイト、日本オリンピック委員会公式サイトなどより作成。

本はこれら 13 回の大会で獲得した計 134 枚の金メダルのうち、柔道だけで 48 枚をも稼いだ。メキシコシティ五輪を入れても、1964 東京以降の五輪大会における日本の金メダル獲得総数の中で、柔道種目が占める割合は 33% に至った。全体として見ても日本にとって柔道は、五輪で最も貢献度の高い競技種目であった。

これらの五輪大会での柔道種目の金メダルは計 152 枚あり、日本はその 32% を勝ち取った。同種目における王者ぶりを見せつけた。

2020 東京五輪では新たにスケートボード、スポーツクライミング、サーフィン、空手、野球・ソフトボール<sup>7)</sup> の 5 つの競技種目が加わった。これらの新設競技種目も直ちに日本の金メダル獲得に大きく貢献した。日本は同新設 5 競技種目で、金メダル 6 枚、銀メダル 4 枚、銅メダル 4 枚を勝ち取った。これは今大会で日本が得た金メダル総数の 22%、銀メダル総数の 29%、銅メダル総数の 24% に当たる。新設競技種目が果たした効果は絶大であった。

表3 2020五輪各競技種目における日本の金メダル数

正式種目となつた大会	競技種目	金メダル数	正式種目となつた大会	競技種目	金メダル数
	水泳	2		テニス	0
	陸上競技	0		卓球	1
	自転車競技	0		バドミントン	0
	レスリング	5		バスケットボール	0
	体操	2	1964 五輪	バレーボール	0
	カヌー	0	2020 五輪	スケートボード	3
	射撃	0		トライアスロン	0
1964 五輪	柔道	9		サッカー	0
	ウエイトリフティング	0		ゴルフ	0
	ボート	0		近代五種	0
	ボクシング	1		ホッケー	0
	フェンシング	1		ハンドボール	0
	セーリング	0	2020 五輪	野球・ソフトボール	2
	テコンドー	0		ラグビー	0
2020 五輪	空手	1	2020 五輪	スポーツクライミング	0
	馬術	0	2020 五輪	サーフィン	0
	アーチェリー	0		合計	27

注1：競技種目順は表1同様。

出所：2020東京五輪公式サイト、日本オリンピック委員会公式サイト、各競技種目国際連盟公式サイトなどより作成。

表3で示すように、1964東京五輪で新設した柔道とバレーボールの2競技種目も加えれば、二度の東京五輪で新設した計7競技種目で、今大会の日本チームに、合わせて15枚の金メダルがもたらされた。これは2020東京五輪における日本の金メダル獲得総数の56%にも相当する。

## 2. アジア四度の五輪における種目新設ゲーム

初回の1896アテネ五輪大会では陸上、競泳、ウエイトリフティング、射撃、自転車、レスリング、体操、フェンシング、テニスの9競技種目しかなかった。2020東京五輪になると、種目数は33に増え、金メダル数も339枚に上った。1896アテネ五輪から2020東京五輪までの125年間で多くの国が、自国に有利な競技種目をオリンピックに引き入れた。

### (1) 国際オリンピック委員会と開催国とのパワーバランス

オリンピックにおける競技種目の新設はハードルが高く、審議の過程が複雑である。しかし競技種目の新設に関しては、時期によって多少違いはあるものの、五輪開催国が一定の提案の権限を持つ<sup>8)</sup>。大雑把に整理すると、1984 ロサンゼルス五輪まで、五輪大会のビジネスモデルが確定せず赤字続きで大会開催国（都市）の確保が困難だった。そのため、国際オリンピック委員会（IOC：International Olympic Committee）と開催国（都市）のパワーバランスはより後者にあり、競技種目の新設に関する主導権も後者に有利だった。

1984 五輪では開催都市の申請はロサンゼルスのみであった。それを契機に、ロサンゼルス五輪ではピーター・ユベロス<sup>9)</sup>の主導で放送料権の入札、1 業種につき 1 社に限定でのスポンサー契約など思い切った取り組みが行われ、テレビ放送料権、スポンサード（協賛金）、観戦チケット販売の 3 本柱からなるビジネスモデルが確立され、五輪大会の収益が急増した。さらに、衛星伝送技術による全世界に向けたテレビ中継により五輪人気が高まった。これにより、IOC のパワーが増大し、新設種目に関する IOC の規制も徐々に強まった。

### (2) アジア五輪での競技種目の新設

アジアにおいて、初めてのオリンピック開催は 1964 東京五輪であった。日本は開催国の地位をうまく活かし、柔道とバレーボールを新設競技種目として取り入れることに成功した。

1964 東京五輪で、日本は 4 枚あった柔道の金メダルのうちの 3 枚を取った。バレーボールでは 2 枚の金メダル争いのうち、いわゆる「東洋の魔女」が女子の金メダルに輝き<sup>10)</sup>、男子は銀メダルを獲得した。同大会で日本は合わせて 16 枚の金メダルを獲得し、その四分の一を新設競技種目の柔道とバレーボールが占めた。

アジアでの二度目のチャンスは、1988 ソウル五輪であった。この大会では卓球が新設競技種目入りし、バドミントン、テコンドー、野球も初めて公開競技としてオリンピックの舞台に登場した。

ソウル五輪で、卓球は直ちに韓国に 2 枚の金メダルをもたらした。バドミントンと野球はソウル五輪での公開競技を経て 1992 バルセロナ五輪に、テコンドーは 2000 シドニー五輪でそれぞれ正式競技種目となり、韓国の金メダル獲得種目となった。卓球、バドミントン、テコンドー、野球の 4 種目はこれまでの五輪大会で、韓国に合わせて 22 枚の金メダル、13 枚の銀メダル、27 枚の銅メダルをもたらした。

残念ながら 2008 北京五輪において、競技種目の新設は成らなかった。中国は自ら金メダル鉱脈を掘るチャンスを逃した。

日本は、競技種目の新設にあたり、1964 東京五輪の経験と、その後半世紀の準備期間を踏まえ、2020 東京五輪で一挙に 5 つの競技種目を新設することに成功、金メダル攻防戦における礎をさらに強固にした。

### 3. 中国のオリンピック金メダル鉱脈：強くても、メダル数に欠け

二度の東京五輪とソウル五輪で新設された競技種目は、10種目にのぼる（公開競技として登場し、その後正式競技種目になったものを含む）。この10種目すなわち柔道、バレーボール、卓球、バドミントン、テコンドー、スケートボード、スポーツクライミング、サーフィン、空手、野球・ソフトボールのほとんどは、アジア人の身体能力に適した競技種目である。

実は、こうした競技種目は中国の金メダル獲得にも多大な貢献を果たした。今回の東京五輪大会で、中国はこの10種目で金メダル6枚、銀メダル8枚、銅メダル2枚を獲得した。

とりわけ中国は卓球で4枚、バドミントンで2枚の金メダルを奪った。これは、この2つの競技種目の金メダル数の、各々五分の四、五分の二に当たる。

これまでの五輪大会で、中国は卓球で累計32枚の金メダルを獲得した。これは同競技種目の金メダル数の86%を占めている。バドミントンでは中国は合計20枚金メダルを獲得し、これは同競技種目の金メダル数の51%を占めた。卓球とバドミントンの両競技種目は圧倒的優位で、中国金メダルの大鉱脈となった。

しかし、金メダル数からすると、この二競技種目で獲得できる枚数はなかなか増えていない。卓球はソウル五輪以来、金メダル数は4枚に止まり、2020東京大会でようやく5枚となった。

バドミントンも、1992バルセロナ五輪で正式種目となり4枚の金メダルを据え、1996アトランタ五輪でバドミントンの金メダル数は5枚になったものの、その後金メダル数に変化はない。

卓球とバドミントンの金メダル数は、柔道のように当初の4枚から現在の15枚へと大金脈に発展するような展開にはなっていない。

それにも関わらず、中国のこれまでの五輪での金メダル獲得総数の中で卓球は、水泳、ウエイトリフティング、体操に次いで第4位の競技種目である。バドミントンも同第6位の種目となっている。

上記の分析から、強い競技種目における金メダル数を如何に増やしていくかについても、オリンピック金メダル攻防戦における一つ重要な課題であることが分かる。

### 4. 武術の五輪への道程

武術をオリンピック競技種目にするのは中国人の夢である。特に柔道、テコンドー、空手が相次ぎ五輪正式競技種目となったいま、夢実現への思いはさらに強まっている。

### (1) 武術はこれまで、なぜ五輪の正式競技種目になれなかったのか。

武術にとって 2008 北京五輪は正式競技種目になる絶好のチャンスであった。しかし主催国（都市）の「特権」を駆使したにも関わらず、武術は最終的に同五輪期間では「2008 北京五輪武術トーナメント」としての特別開催にとどまった<sup>11)</sup>。その後の五輪大会においても武術はいまだオリンピック正式競技種目にはなれていない。

十分な準備期間がなかった故であろうか？ 柔道の場合は、1951 年に国際柔道連盟（IJF：International Judo Federation）の設立から 1964 東京五輪で正式競技種目になるまで 13 年かかった。テコンドーの場合は、1973 年にワールドテコンドー（WT：World Taekwondo）<sup>12)</sup> が設立し 2000 シドニー五輪で正式競技種目となるまで 27 年かかった。空手は、1970 年の世界空手連合（WUKO：World Union of Karate Organizations）<sup>13)</sup> 設立から 2020 東京五輪での正式競技種目採用まで 50 年を費やした。

武術の場合は、1990 年国際武術連盟（IWUF：International Wushu Federation）の設立から 2008 年の北京五輪まで 18 年もあった。この時点ですでに柔道の場合より準備期間が長かった。さらに 2020 東京五輪までは 30 年の準備期間を擁していた。その意味では決して時間が足りなかったとは言えないだろう。

実際の問題は、武術の競技種目としての中身の設置戦略にあった。

武術を北京五輪正式競技種目として申請するにあたり、2001 年に国際武術連盟が IOC に提出した設置案の中身には、男子は長拳、南拳、刀術、棍術の 4 種目が、女子は長拳、太極拳、剣術、槍術の 4 種目が挙げられた。競技種目としての中身が煩雑で統一したルールもなく、審議が通らなかったのも当然であった。

### (2) 柔術をスポーツへと生まれ変わらせた柔道

前述のように、武術と対照的な事例は柔道である。柔道の成功要因には、嘉納治五郎<sup>14)</sup> が早くも 1882 年に柔術理論及び技術の体系をとりまとめ、危険性のある技を取り除き、近代的な訓練方法を制定したことが挙げられる。これにより伝統的な柔術は、近代的な柔道というスポーツへと生まれ変わった。1909 年東洋人として初のオリンピック委員会委員となった嘉納治五郎のような近代スポーツに理解のある人物による柔術のスポーツへの改造が、極めて重要な役割を果たした。

第二次大戦後、日本は世界に柔道を積極的に広めると同時に、スポーツとしての柔道の規範をさらに改善し、世界に受け入れられる競技へと発展させた。

1964 東京五輪で日本は柔道を金メダル 4 枚の正式競技種目として、織り込んだ。その後徐々に性別、重量別の金メダル数を増やし、最終的に 15 枚の金メダルを誇る一大競技種目に仕立て上げた。柔道は、いまやオリンピックにおける日本の金メダル大鉱脈となっただけでなく、日本の歴史文化を世界へ伝える一大ソフトパワーともなっている。

東京オリンピックから見たもう1つの金メダル攻防戦

柔道の経験から見ると、武術の五輪への道は先ず種目の中身をシンプルに絞る必要がある。数多くの武術種目をいくつかの競技種目に分け、段階的にオリンピックに織り込んでいくことが考えられる。

何より大事なものは、伝統的な武術を近代的なスポーツへと変貌させていくことである。そのためには、柔術を柔道へ変身させた嘉納治五郎や、テコンドーを近代スポーツとして形を整えた崔泓熙<sup>15)</sup>のような人物を中心に協議を重ね、五輪競技種目化への整備を進めることが重要となる。

### (3) 太極拳に的を絞る

上記の分析から、武術の五輪への道は先ず、国際的な愛好者の多い太極拳に的を絞って進めることが考えられる。

現在、世界の太極拳愛好者は億人単位にのぼると言われ、国際的な知名度も好感度も高い。太極拳を五輪種目入りさせるには、以下に挙げる3つのステップが必要であろう。

- ①数多くの流派がある太極拳を、近代スポーツとしての太極拳へと変身させ、その統一的な競技ルールを取り決める。
- ②太極拳を国際武術連盟に属するひとつの種目として留め置くことなく、独立した国際太極拳連盟を設立し、IOCの認可を得る。
- ③国際的な普及を進め、オリンピック正式競技種目として申請する。正式競技種目となった後にも継続して同種目における金メダルの設置数を増やしていく。

自国の伝統文化をオリンピックの金脈として形作るには、正確な戦略と長期にわたる努力が欠かせない。

## 5. アジア五輪での新設競技種目はアジアに貢献

前述したように初開催の1896アテネ五輪大会では9つの競技種目のみであった。当時アジアでは近代スポーツに関する認識がまだ薄かった。これらの種目にもアジア発のものはなかった。

アジアで、これまで四度行われた五輪のうち、東京五輪とソウル五輪で新設された競技は、10種目にのぼる（公開競技として登場し、その後正式種目になったものを含む）。表1が示すように、これらアジア五輪新設種目は今回の東京五輪の33種目の30%にあたり、その金メダル数も全種目合計339枚の16%に当たる。

アジア五輪で新設された競技種目のほとんどは、アジア人の身体能力に適した種目である。こうした競技種目の増設により、アジア諸国のオリンピックにおける存在感も高まった。2020東京五輪で金メダル獲得数のトップ3に中国と日本という2つのアジアの国が入った



ことは、競技種目の新設努力によるものが大きい。

表 4 が示すように 1964 東京五輪以来、アジア五輪新設競技種目が稼いだ金メダル数は、日本の金メダル獲得総数の 40% にものぼった。

表 5 が示すように、韓国が 1964 東京五輪以来、アジア五輪新設競技種目で稼いだ金メダル数は、同国の金メダル獲得総数の 34% にものぼった。アジア五輪新設競技種目は韓国の五輪の成績にも大きく貢献した。

表 6 が示すように中国は 1984 ロサンゼルス五輪で初参加して以来、アジア五輪新設競技種目が稼いだ金メダル数は、同国の金メダル獲得総数の 26% にのぼった。アジア五輪新設競技種目は中国の五輪成績に大きく貢献した。前述したように卓球とバドミントンがすでに中国の強い競技種目となっていた。それだけではなく、これまでに柔道、テコンドーでもそれぞれ 8 枚、7 枚の金メダルを獲得した。バレーボールも人気が高く、これまでに 3 枚の金メダルを獲得している。これらのアジア五輪新設競技種目は中国に金メダルをもたらしただけでなく、人気スポーツとして中国での普及も進んでいる。

アジア五輪新設競技種目には柔道、テコンドー、空手などアジア諸国の歴史文化のバックグラウンドを持つ競技もある。これらの競技種目は、関係国のソフトパワーを世界へ発信する大きなチャンネルとなった。

特記すべきは、こうした新設競技種目が、アジアにおける人的交流をも一層促進したことである。

## 6. 中国における卓球の「北強南弱構造」

卓球は 1988 ソウル五輪から正式競技種目になって以来、合計 37 枚の金メダルが出た。中国はそのうち 86% に当たる 32 枚を獲得した。卓球はいまやオリンピックにおける中国の最強種目となっている。

中国を、長江を境として北部と南部とに大雑把に分け、これまでの計 29 人の卓球五輪金メダリストを出身地別に見た。21 人が北部出身であり、特に東北地方出身者は 10 人にものぼった。南部出身者は 8 人であった。すなわち中国卓球五輪金メダリストの出身地では北部は 72%、南部は 28% となっている。

中国の卓球オリンピック金メダリストに北部出身者が多いだけではない。興味深いのは、日本のトップクラスの卓球選手の多くが、流暢な北部訛りの中国語を喋ることである。日本の一流選手のコーチに、中国北部出身者が多い故である。

中国の卓球選手が選手として、そしてコーチとして、世界各国で活躍して久しい。

この現象はスポーツとしての卓球の世界的普及に大きな役割を果たしてきた。日本でも大勢の中国出身の卓球コーチが日本人選手育成に尽力している。これら中国北部出身のコーチ

表4 アジア五輪の新設競技種目で日本が獲得した金メダル数

五輪大会	金メダル総数	柔道	バレーボール	卓球	テコンドー	バドミントン	野球・ソフトボール	空手	サーフィン	スポーツクライミング	スケートボード	比重
1964 東京五輪	16	3	1									25%
1968 メキシコシティ五輪	11											0%
1972 ミュンヘン五輪	13	3										23%
1976 モントリオール五輪	9	3	1									44%
1980 モスクワ五輪	0											—
1984 ロサンゼルス五輪	10	4										40%
1988 ソウル五輪	4	1										25%
1992 バルセロナ五輪	3	2										67%
1996 アトランタ五輪	3	3										100%
2000 シドニー五輪	5	4										80%
2004 アテネ五輪	16	8										50%
2008 北京五輪	9	4										44%
2012 ロンドン五輪	7	1										14%
2016 リオ五輪	12	3				1						33%
2020 東京五輪	27	9		1			2	1			3	59%
合計	145	48	2	1	0	1	2	1	0	0	3	40%

出所：2020 東京五輪公式サイト、日本オリンピック委員会公式サイトなどより作成。

表5 アジア五輪の新設競技種目で韓国が獲得した金メダル数

五輪大会	金メダル総数	柔道	バレーボール	卓球	テコンドー	バドミントン	野球・ソフトボール	空手	サーフィン	スポーツライティング	スケートボード	比重
1964 東京五輪	0											—
1968 メキシコシティ五輪	0											—
1972 ミュンヘン五輪	0											—
1976 モントリオール五輪	1											—
1980 モスクワ五輪	0											—
1984 ロサンゼルス五輪	6	2										33%
1988 ソウル五輪	12	2		2								33%
1992 バルセロナ五輪	12	1				2						25%
1996 アトランタ五輪	7	2				2						57%
2000 シドニー五輪	8				3							38%
2004 アテネ五輪	9	1		1	2	1						56%
2008 北京五輪	13	1			4	1	1					54%
2012 ロンドン五輪	13	2			1							23%
2016 リオ五輪	9				2							22%
2020 東京五輪	6											—
合計	96	11	0	3	12	6	1	0	0	0	0	34%

注：野球は1988ソウル五輪で公開競技となった。1992バルセロナ五輪で正式競技種目となったが、2012ロンドン五輪で正式競技種目から外された。2020東京五輪で野球・ソフトボールとして正式競技種目になった。本表は便宜のため野球の金メダルを野球・ソフトボール欄に入れた。

出所：2020東京五輪公式サイト、Korean Sport & Olympic Committee 公式サイトなどより作成。

表6 アジア五輪の新設競技種目で中国が獲得した金メダル数

五輪大会	金メダル総数	柔道	バレーボール	卓球	テコンドー	バドミントン	野球・ソフトボール	空手	サーフィン	スポーツライミング	スケートボード	比重
1984 ロサンゼルス五輪	15		1									7%
1988 ソウル五輪	5			2								40%
1992 バルセロナ五輪	16	1		3								25%
1996 アトランタ五輪	16	1		4		1						38%
2000 シドニー五輪	28	2		4	1	4						39%
2004 アテネ五輪	32	1	1	3	2	3						31%
2008 北京五輪	51	3		4	1	3						22%
2012 ロンドン五輪	38			4	1	5						26%
2016 リオ五輪	26		1	4	2	2						35%
2020 東京五輪	38			4		2						16%
合計	265	8	3	32	7	20	0	0	0	0	0	26%

出所：2020 東京五輪公式サイト，中国国家体育总局公式サイトなどより作成。

表 7 中国の卓球五輪金メダリスト出身地

地域	都市	省・自治区	金メダリスト (人)	比重
北部	ハルビン市	黒竜江省	1	72%
	大慶市	黒竜江省	1	
	チチハル市	黒竜江省	1	
	長春市	吉林省	1	
	瀋陽市	遼寧省	1	
	鞍山市	遼寧省	3	
	撫順市	遼寧省	2	
	北京市	北京市	2	
	石家荘市	河北省	1	
	青島市	山東省	2	
	鄭州市	河南省	1	
	新郷市	河南省	1	
	徐州市	江蘇省	2	
	南通市	江蘇省	2	
南部	武漢市	湖北省	3	28%
	上海市	上海市	1	
	台州市	浙江省	1	
	成都市	四川省	1	
	南寧市	広西チワン族自治区	1	
	広州市	広東省	1	

注：金メダリストの中には一人で複数の金メダルをとる選手もいるが、金メダリスト一人として換算する。

出所：中国国家体育总局公式サイト及び中国卓球各オリンピック金メダリストの公開情報により作成。

は日本で教えるだけでなく、教え子をふるさと中国での強化合宿に連れて行く。中国での特訓で育てられた日本人選手は、自然と北部訛りの中国語を会得する。

例えば四度の五輪出場を果たした日本人卓球選手の福原愛は、専属コーチも専属スパーリングパートナーも中国東北地方出身者であった。彼女はまた中国遼寧省にある本溪鋼鉄クラブに所属したことで、東北訛りの中国語にさらに磨きをかけた。

卓球のオリンピック金メダル分布は、中国で「北強南弱構造」になっているだけではなく、世界的に見ても中国、日本、韓国といった北東アジアに集中する構造となっている。

これまでのオリンピック大会の卓球競技の結果を見ると、中国は金メダル 32 枚、韓国は

東京オリンピックから見たもう1つの金メダル攻防戦

同3枚、日本は同1枚を取り、三カ国合計で同種目97%の金メダルをものにした。唯一の例外は1992バルセロナ五輪でスウェーデンの選手が金メダルを1枚獲得したことである。

北東アジア三カ国が、オリンピックにおける卓球金メダルを総ナメできたことは、同地域における濃厚な人的交流の賜物である。

卓球は日本ではオリンピックで決して強い種目ではないものの、人気が高い。これは中国の選手との長い交流や切磋琢磨の歴史が寄与しているといっている。

これに加え、卓球を介した歴史的なエピソードも残っている。1971年、愛知県名古屋市で行われた第31回世界卓球選手権に、中国が6年ぶりに出場し、大会終了後に中国がアメリカの卓球選手を自国に招待したことを契機に世界のパワーバランスが大きく変わった。同年7月にキッシンジャー大統領補佐官が極秘に訪中、1972年2月にニクソン大統領が訪中、のちの日中国交正常化もすべてがこの「ピンポン外交」の賜物であった。中国の改革开放そしてソ連の崩壊も、こうしたパワーバランスの変化の結果といえよう。卓球を介したこの歴史的な大転換を記念する行事は、いまなお日本で開催されている<sup>16)</sup>。

AI対話アプリを提供するSELFが2020東京五輪の直後に実施した「東京オリンピックに関するアンケート調査」では、「東京オリンピックで、あなたが最も楽しんだ競技は？」の回答で、ダントツ1位に輝いたのは卓球だった。オリンピックで最も金メダルを稼いだ柔道は第3位であった<sup>17)</sup>。卓球の絶大な人気には、アジアの人的交流の積み重ねがある。

歴史のさまざまな要因で北東アジアの国と国との関係と感情には、いまだ対立と不信感が残っている。しかし、長い交流の歴史があるゆえに、北東アジアにおける個人と個人の間には、強い磁力がある。

## 7. 中国におけるバドミントンの「南強北弱構造」

中国での卓球の「北強南弱構造」と真逆なのが、バドミントンの「南強北弱構造」である。

バドミントンは1988ソウル五輪で公開競技種目となり、1992バルセロナ五輪で正式競技種目となった。その後のほぼ30年間の五輪大会で、バドミントンは合計39枚の金メダルを出した。中国はそのうち51.2%にあたる20枚をも獲得した。バドミントンは中国にとってオリンピックで金メダルを稼げるもうひとつの強い競技種目であった。

五輪史上中国の計22人のバドミントン金メダリストの出身を調べると、表8が示すように今度はなんと南部出身者が多かった。具体的には、長江以北が僅か5人で、長江以南が17人に上った。すなわち中国バドミントン五輪金メダリストの出身地では南部は77%、北部は23%となっている。

視野を中国からアジアに広げると、オリンピックのバドミントン金メダル数は累積で中国のほかインドネシア8枚、韓国6枚、日本1枚、中華台北1枚となっている。オリンピック

表 8 中国のバドミントン五輪金メダリスト出身地

区域	都市	省・自治区	金メダリスト (人)	比重
北部	錦州市	遼寧省	1	23%
	鞍山市	遼寧省	2	
	北京市	北京市	1	
	南通市	江蘇省	1	
南部	蘇州市	江蘇省	2	77%
	無錫市	江蘇省	1	
	杭州市	浙江省	1	
	嘉興市	浙江省	1	
	武漢市	湖北省	2	
	宜昌市	湖北省	1	
	荊州市	湖北省	2	
	重慶市	重慶市	1	
	竜岩市	福建省	1	
	泉州市	福建省	1	
	益陽市	湖南省	2	
	掲陽市	広東省	1	
	広州市	広東省	1	

注：金メダリストの中には一人で複数の金メダルをとる選手もいるが、金メダリスト一人として換算する。

出所：中国国家体育总局公式サイト及び中国バドミントン各オリンピック金メダリストの公開情報により作成。

のバドミントン金メダルにおけるアジアの国と地域の獲得率は 92% にものぼる。ここに、もう 1 つアジアにおける人的交流の道が見えてくる。

中国でのバドミンントンの発展は、インドネシア華僑の貢献が大きい。1954 年王文教ら 4 人の華僑がインドネシアから中国に帰国したことが、スポーツとしてのバドミンントンの中国展開の始まりであった<sup>18)</sup>。1960 年、インドネシアから湯仙虎、侯家昌、方凱祥、陳玉娘ら青年選手が相次いで帰国したことが、中国のバドミンントンパワーのさらなるアップにつながった<sup>19)</sup>。これらインドネシア華僑が選手として、またコーチとして中国のバドミンントンの礎を築いた。

上記に鑑みれば、これら華僑のルーツにあたる中国の南部でのバドミンントンの人気と強さは当然であろう。

## 8. 新時代におけるさらなる国際交流を

歴史の流れで見れば、今日のアジア諸国は周辺の国々との交流の中で形作られてきた。中国の北部と北東アジアにしる、南部と東南アジアにしる、それぞれ密接な人的交流を重ねてきた。こうした脈絡はオリンピックで活躍する選手の背中から伺える。

アジアの国家間のセンシティブな関係は多くの場合、歴史的な重荷として捉えられている。だが、いま、アジアにおける濃厚な人的交流をこそ、貴重な歴史遺産として認識すべきである。今日、世界のパラダイムシフトの中で、こうした歴史遺産を活かし、アジアにおける平和と繁栄を築いていくべきである。

1984年ロサンゼルス五輪以来、テレビ中継をテコに、オリンピックは人気と収益の増大を実現させた。しかし、時代はすでにテレビからネットへ、そして国本位から人間本位へと急速にシフトしている。こうした新時代にふさわしい競技種目の選定、そして五輪の新しいビジネスモデルの確立が大きな課題となっている。IOCもこれを意識し、2021年3月12日の第137次IOC総会で採択された「オリンピック・アジェンダ2020+5」は、「連帯」、「デジタル化」、「持続可能な開発」、「信頼性」、「経済的・財政的なレジリエンス」を訴えている<sup>20)</sup>。

IOCの改革を受けて、ネット時代におけるデジタル交流を含む人的国際スポーツ交流の一層の深まりが期待される。

(本論文では甄雪華、趙建の両氏がデータ整理に携わった)

### 注

- 1) 周牧之「为“紧急事态宣言”下的东京奥运会祈福」,『中国網 (China.com.cn)』, 2021年7月23日 ([http://www.china.com.cn/opinion/2020/2021-07/23/content\\_77646834.shtml](http://www.china.com.cn/opinion/2020/2021-07/23/content_77646834.shtml))。
- 2) Zhou Muzhi, “Praying for Tokyo Olympics under state of emergency” In *China. org. cn*, 28 July 2021 ([http://www.china.org.cn/opinion/2021-07/28/content\\_77657768.htm](http://www.china.org.cn/opinion/2021-07/28/content_77657768.htm))。
- 3) 周牧之「奥运金牌攻防战的亚洲之路」,『中国網 (China.com.cn)』, 2021年8月19日 ([http://www.china.com.cn/opinion/think/2021-08/19/content\\_77702955.htm](http://www.china.com.cn/opinion/think/2021-08/19/content_77702955.htm))。
- 4) Zhou Muzhi, “Asian path of winning and securing Olympic gold medals” In *China. org. cn*, 7 September 2021 ([http://www.china.org.cn/sports/2021-09/07/content\\_77738406.htm](http://www.china.org.cn/sports/2021-09/07/content_77738406.htm))。
- 5) 周牧之「从东京奥运会看亚洲人文交往格局」,『中国網 (China.com.cn)』, 2021年8月31日 ([http://www.china.com.cn/opinion/think/2021-08/31/content\\_77725398.htm](http://www.china.com.cn/opinion/think/2021-08/31/content_77725398.htm))。
- 6) Zhou Muzhi, “A look at Asia’s people-to-people exchanges from Tokyo 2020” In *China. org. cn*, 6 September 2021 ([http://www.china.org.cn/sports/2021-09/06/content\\_77736385.htm](http://www.china.org.cn/sports/2021-09/06/content_77736385.htm))。
- 7) 野球は1988ソウル五輪で公開競技となり、1992バルセロナ五輪で正式種目となったが、2012ロンドン五輪で正式種目から外された。2020東京五輪で野球・ソフトボールとして正式種目となった。ゆえに本論では野球をソウル五輪での新設競技種目として扱うと同時に、野球・ソ



フトボールを 2020 東京五輪での新設種目とする。

- 8) 五輪開催国が新設種目で有する提案の権限は、時期によって違いがある。第二次大戦終戦までの 10 度の五輪大会では、主催国が競技種目数と種目類について選択の権限を持っていた。戦後、発展途上国も五輪に相次いで参加するようになり、五輪の影響力が高まった。開催国申請及び競技種目新設“熱”が高じ、五輪競技種目数も急速に膨らんだ。2000 年以降、競技種目数に対する制限の動きが強まり、2002 年メキシコシティーで開催された IOC 総会で今後の五輪競技種目を 28 種目、金メダル数 301 枚、参加選手 10500 人以内に収めることが決議された。これ以降、競技種目の新設は厳しくなった。しかし、2014 年の IOC 臨時総会は、中長期改革「五輪アジェンダ 2020」を承認、開催国は、IOC の承認を条件に 1 競技を追加提案でき、さらに開催都市がその大会に限り追加種目を提案できることになった。
- 9) ピーター・ヴィクター・ユベロス (Peter Victor Ueberroth, 1937～) は、アメリカの実業家、1984 年ロサンゼルス五輪の大会組織委員長を務め、テレビ放映権の競売やスポンサープログラムの改革を実施し、赤字続きだった五輪大会を黒字に転換させた。
- 10) 「東洋の魔女」は、大日本紡績 (のちの、ユニチカ) 貝塚工場の女子バレーボールチームからスタートし、活躍した女子バレーボール日本代表チームの呼び名である。1964 東京五輪では、圧倒的な力でソ連チームを破って金メダルを獲得し、絶大な人気を得た。
- 11) 「2008 北京五輪武術トーナメント」は IOC が承認し、北京オリンピック組織委員会 (BOCOG) が主催して実施した。会期はオリンピック期間の最後の 4 日間にあたる 8 月 21 日 (木) ～24 日 (日)。会場は北京オリンピック公園内にあるオリックススポーツセンター体育館。「武術トーナメント」には 43 の国・地域から 126 人 (套路 86 人、散手 40 人) のトップ選手が参加、世界の注目を集める歴史的な大会となった。「北京武術トーナメント」では套路競技男女 5 種目計 10 種目と散手男女計 5 種目のあわせて 15 種目が実施される。出場枠と参加資格は 2007 年 11 月の「第 9 回世界武術選手権大会」(北京) の成績によって定められ、日本は男女太極拳、男女南拳、男子長拳の計 5 種目と散手 70kg 級の 1 種目、計 6 種目で 6 人が参加し、銀 1、銅 2 を獲得した。
- 12) 世界テコンドー連盟 (WTF : World Taekwondo Federation) 1973 年に設立された。2017 年 6 月 23 日にワールドテコンドー (WT : World Taekwondo) に改称した。
- 13) 1993 年に世界空手連合 (WUKO : World Union of Karate Organizations) から世界空手連盟 (WKF : World Karate Federation) へ改称された。
- 14) 嘉納治五郎 (1860～1938) は、東京大学文学部卒業、1882 年講道館を設立、柔術から柔道への理論及びルール作りを手がけた。1909 年東洋初のオリンピック委員会委員になった。
- 15) 柔術から柔道への変身では嘉納治五郎の役割が大きかったと同様、テコンドーを近代スポーツとして形を整え、国際的に普及させ、さらに五輪競技種目としたのには、崔泓熙 (1918～2002) の役割が大きかった。
- 16) 名古屋市を舞台に行われたピンポン外交を記念し、2021 年 8 月 26 日に「ピンポン外交 50 周年記念シンポジウム」が盛大に行われた。詳細は 2021 年 8 月 27 日『中日新聞』を参照。
- 17) SELF が 2020 東京五輪の直後に実施した「東京オリンピックに関するアンケート調査」に関しては <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000082.000018339.html> を参照。
- 18) 1954 年にインドネシアから中国に帰国した王文教はもとよりインドネシアのバドミントン若手選手としてスター的存在であった。1972 年から中国のバドミントンナショナルチームのコ

## 東京オリンピックから見たもう1つの金メダル攻防戦

ーチとなった。中国のバドミントン競技の礎を築いただけでなく、同氏が率いた中国チームは様々な国際大会で優勝を重ねた。

- 19) 1960年、インドネシアから中国に帰国した若手選手の中で特に湯仙虎の業績が秀でていた。選手として国際大会で数々の優勝経験を持つだけでなく1982年から中国チームのコーチとして数多くの若手選手を育成した。
- 20) 詳しくは「オリンピック・アジェンダ2020+5」[https://www.joc.or.jp/olympism/agenda2020/pdf/agenda2020-5-15-recommendations\\_JP.pdf](https://www.joc.or.jp/olympism/agenda2020/pdf/agenda2020-5-15-recommendations_JP.pdf)を参照。